重症心身障害者地域生活支援センター

発行者：社会福祉法人じねんじょ
発行日：平成28年3月吉日
ＴＥＬ：083-252-2227
ＦＡＸ：083-252-2259
E-mail：jinenjo@jinenjo.or.jp
http://www.jinenjo.or.jp

大地

（じねんじょ通信）

VOL. 25
2016/03

4月から障害者差別解消法が施行!!

社会福祉法人じねんじょ
理事長　金原　洋治

13年目の春を迎えました。平素からじねんじょの活動にご支援頂き感謝しております。

4月1日から障害がある人達にとって大切な法律である障害者差別解消法がスタートします。障害がある人は勿論、ご家族や私たち支援者にとっても大変喜ばしいことです。2006年に国連で障害者権利条約が採択され、日本政府は、10年かけて関連法案を整備するなどの準備を進めてきました。この法律では、差別の禁止に加えて「合理的配慮をしないことも差別になること」が法律で定められました。合理的配慮とは、生活のあらゆる分野で、障害があっても困らないようにするための配慮を意味しています。今までは、配慮を申し出ても、「できない」と言われても「しかたがない」と諦めていたことが多いと思いますが、この法律の施行によって法的義務が生じることになりました。当法人においても、職員一同、福祉の現場での差別や合理的配慮について学び、可能な限りの配慮が実行されるよう努めたいと思っています。

社会福祉法人じねんじょに福祉車輌寄贈

重症心身障害者地域生活支援センターで平成27年12月10日(木)に福祉車輌の贈呈式がありました。

株式会社松岡（代表取締役　松岡隆雄）様より『創立65年記念事業』の一環として、社会福祉法人じねんじょに福祉車輌を寄贈して頂きありがとうございます。

贈呈式では、同社取締役管理本部長松岡貴子様から「創立65年を迎えられたのも地元の応援のおかげ。少しでも地元でお役に立てたら」と挨拶があり、利用者（メンバーさん）の笑顔と保護者、職員みんなで感謝の気持ちをお伝え致しました。

この福祉車輌は愛称「ヨの出号」と呼ばれ、重症心身障がい児者の方たちの送迎や地域活動を広げるために活用していきます。これからも宜しくお願いいたします。

※株式会社松岡は、昭和25年2月に門司市（現北九州市）で創業。昭和48年11月に下関市東大和町に同社初の冷凍冷蔵倉庫を建て、昭和53年5月に下関市東大和町1-10-12に鉄筋コンクリート造4階建の本社々屋を建設、門司本社を閉鎖し新社屋に於て事業を開始する。

相談支援事業（計画相談支援・障害児相談支援）を立ち上げます　小寺　美帆

当法人は、重症心身障害児者の地域生活支援に特化した法人運営を目指してきました。その中で日中活動の充実とともに、安定した在宅生活が送れるように、メンバーや家族の想いや希望に寄り添いながら、他の多様なサービス利用を調整してきました。平成24年には重症心身障害児者の地域生活の更なる充実を図ることを目的に、居宅介護事業所「ふわり」を開始しました。そして今年6月に相談支援事業を立ちあげる運びとなりました。

以下に相談支援事業の概要と事業立ち上げまでの経緯をご説明したいと思います。

障害者総合支援法とサービス等利用計画

障害者総合支援法は、障害のある方たちが望む地域での生活を実現するために、必要なサービスやさまざまな地域の資源を組み合わせて利用することで、安心した地域生活が可能となることを目指しています。そのために相談支援専門員が中心となり、地域に散在しているサービスや資源を有機的に結び付け、サービス提供者と調整し、関係者によるサービス等調整会議を実施しながら障害のある方たちを支える支援チームを形成することが必要となりました。その過程において具体的支援を記述した計画（以下「サービス等利用計画」という）を作成することの重要性が高まり、平成27年4月からは障害福祉サービスを利用するに当たって、サービス等利用計画案の提出が必須となりました。

「どんなに重たい障害があっても住み慣れた地域で暮らしたい」を支えたい

・NICU等長期入院児支援事業　ワーキング会議

新生児医療の発展とともに、全国的に、人工呼吸器、気管切開などをしたままNICU・GCU・小児病棟（以下、NICU等）に長期入院する子どもが増加しています。

本県も例外ではなく、平成24年度から山口県事業として、子どもの状態に応じた望ましい環境（在宅・施設入所等）への円滑な移行を推進するためNICU等長期入院児支援事業が開始されました。この事業を推進するために、2年間にわたりワーキング会議が開催され、私は児童発達支援事業「むくっこ」から社会福祉士として参加させていただきました。その他メンバーには、各周産期母子医療センターから新生児科医師、看護師長、医療型障害児入所施設から医師、相談員、県訪問看護ステーション協議会代表看護師、市町障害福祉担当者、県健康増進課、地域医療推進室、障害者支援課の担当者等で、ワーキング会議では各々の現場や立場によって課題や想いがあり、子どもと家族の在宅生活を支えるという一つの目標に向かって共に行動することの難しさをまず感じました。

検討を重ねる中で、地域の医療・福祉サービスが非常に少ない現状にあること、子どもの在宅療養を支えるケアのコーディネートとシステムが未整備であることから、家族が多大な負担を担う場合が多く、この点が在宅移行の大きな課題となっていることが明らかになりました。

この課題の解消に向けて、県立総合医療センター総合周産期母子医療センターに「入院児支援コーディネーター」が、各周産期母子医療センターには「退院調整担当者」が配置されることになりました。これにより入院児コーディネーターと退院調整担当者が入院児の円滑な退院移行に向けて連携を図る仕組みができました。現在は、NICU入院児移行支援検討会議として、年に1回関係者が集まり、先にあげた医療・福祉サービスの充実について関係者へのアンケート調査や勉強会の企画を行っています。

・重症心身障害児者と相談支援事業

私がこれまで参加した研修会においてサービス等利用計画とは、「人生の設計図となるもの」と例えられ、「本人はもとより、複数の事業者が同じ方向を向いて支援していくべき指針となるもの」と学びました。重症心身障害児者の場合、「地域でその人らしい生活を送る」ための個別支援に加え、支援の内容が障害福祉分野に限らず医療分野にも及ぶという特徴があります。

障害者総合支援法に「相談支援」が位置づけられて10年が経過し、相談支援専門員や相談支援事業所も増加して、自立支援協議会を起点にして相談支援体制の充実が図られてきました。当法人も設立10周年を迎え、この相談支援体制の一員となり、他事業所の相談支援専門員の方々と共に障害福祉、特に重症心身障害児者の方たちの福祉の充実を目指していきたいと考えています。

NICU等長期入院児支援事業のワーキング会議でも明らかになったように、重症心身障害児者の地域生活への移行や継続においては、単なるコーディネートだけでなく、関係者のネットワークづくりと資源づくりへの参画も必要です。これまでの経験がどれほど活かせるか分からず、不安な点も多々ありますが、赤ちゃんから大人まで、「どんなに重たい障害があっても住み慣れた地域で暮らしたい」という願いを支えていきたいと思います。

施設内行事

じねんじょフェスティバル2015　～皆様のありのままの笑顔が見たくて～　2015.10.11(日)

今年も多くの方にお越しいただき、たくさんの笑顔に囲まれて盛況のうちにじねんじょフェスティバルを終えることができました。あらためて、人と人とのつながりを感じた1日でした。

下関看護リハビリテーション学校の皆さんによるパワフルなステージ

タイガーフーク＆ちびフークと一緒にゲーム大会

珍しい楽器も登場したオニオンズコンサート

パステル体験は大人気

大越桂さんの作品展示
美しい言葉の数々…

販売コーナーは満員御礼。メンバーの作品も多くの方に見て頂きました。

新春　じねんじょ交流会　2016.1.30(土)

2016年1月30日(土)に海峡メッセ下関10階国際会議場で開催しました。この交流会の目的は、利用メンバーをはじめ、ご家族やじねんじょ関係役員、育む会会員、職員を一同に交え、思い出ばなしや将来について語り合う、そんな楽しい時間を過ごすためのものです。

初めての試みにも関わらず、120名の方々に参加していただくことができました。各事業所やじねんじょの活動グループから日々の様子を紹介してもらい、とても有意義な時間を過ごす事ができました。

むく・むくっこメンバーは「夢かなえトンネル」で、将来の夢を身体全体で表現してくれました。じねんじょメンバーはグループごとの特性を発揮し、会場を盛り上げてくれました。パソコン操作のスイッチを工夫したり、得意な歌で会場を盛り上げたり、笑いヨガで心も身体も、そして会場全体も笑顔にしてくれました。この日の為に、メンバーも職員も一丸となって試行錯誤している様子はとても印象的でした。

こうして書面だけでは伝わらない、活動風景やじねんじょ全体の雰囲気を感じてもらえた、貴重な機会となりました。ご参加くださったみなさま、本当にありがとうございました。

地域行事参加

下関海峡マラソン（2Km）に初チャレンジしちゃいました!!　2015.11.1（日）

「兄弟チャレンジャー 利樹さん、嘉輝さん」　溝部　恵美

溝部家はご兄弟で参加しました。新たなチャレンジに周囲の関係者もドキドキ、わくわくでした。お二人のお母様にご感想をお聞きしました。

①参加のきっかけは?

車いすでよく移動してくれていたので、参加できるのではないかと以前から気になっていましたが、なかなかチャレンジのきっかけがありませんでした。ふわりのヘルパーさんから「どうですか?」と後押しされ参加を決めました。

②当日、走っている二人を応援していて感じたことは?

まずは、参加してよかったなと思いました。

利樹は周りの方々に挨拶をしながら楽しそうにしているので、私も見ていて楽しかったです。ゴール手前からちゃんと自分でこいでゴール!!本人もとても嬉しそうで感動しました。嘉輝は、とても長い距離をマイペースに黙々とこいでいて、頑張る姿にとても感動しました。

2人のたくましく成長した姿を見ることができてよかったです。当日、お世話になった先生に出会えたり、周りの方々が応援してくれたり、とてもよい経験が出来たと思います。

③海峡マラソンに対する今後の抱負はありますか?

輪を広げて、いつもと違った経験が増えていくことが楽しみです。本人たちが楽しく参加できることが一番ですね。

沿道の応援にも応える余裕＾０＾

報道関係者がいてもマイペースで頑張りました。

ゴール直前、表情も真剣です!

参加歴ある大谷さんとゴールで合流。喜びを分かち合いました。

「走り切った2Km!!」　河村　志津香

現在小学校1年生の拓海は、496gの超低出生体重児で生まれ、脳性麻痺という障害を持ち自力での歩行が困難です。けれども、歩行器を使用して歩くことや走ることが大好きです。

海峡マラソンの途中、立ち止まり歩行器にもたれかかる姿もありましたが、「さ・い・ご・ま・で・は・し・る」と強い気持ちと共に沢山の声援も後押しし、ゴールまで走りきることが出来ました。本当に頑張ったと思います。

これからも、いろいろなことにチャレンジし、たくさんの経験が出来たらと思います。

ゲストランナーの猫ひろしさん、間寛平さんと記念撮影をしました。

お兄ちゃんと一緒に頑張りました。

じねんじょの輪

本校がじねんじょさんで小児看護学実習をさせていただくようになって5年になります。病気を持った子どもさんだけでなく、障がいをもちながらも地域で生活しているメンバーさんや、ご家族と関わる事で看護師としての今後につながっていって欲しいという思いで、じねんじょフェスティバルや実習をさせていただいております。今年度はフェスティバルでステージ発表させていただき、皆さんと楽しく過ごすことができました。

また、実習でメンバーさんと関わらせていただく中で、5期生中村君は「自分が挨拶するだけでは目線が合わなかったが、自分から目線を合わせることや、自分自身がこの人は笑っているのではないかと考えていなければ笑顔は見えないと助言をいただいた。その後、関わらせていただく中で実習最終日にメンバーさんが笑顔を見せて下さった。この小児看護学実習は、人の想いや感情を感じ取ることの重要性、その難しさに気づけた実習でした。」と、看護師として大切なコミュニケーションについてたくさん学ばせていただいています。

今後も実習でお世話になりますが、メンバーさんやご家族、スタッフのみなさんとのつながりを大切にしていきたいです。

下関看護リハビリテーション学校
5期生　中村　典明
教　員　田坂真恵美

寄付者氏名（敬称略、順不同）
平成27年7月1日～28年2月29日

やまぐち小児科　ぷくぷくポケット　中野貴博
花笑み　れんげ畑　六人会
じねんじょ窯　(株)松岡　梅光学院幼稚園
梅光学院幼稚園保護者会
さをり織サークル　オニオンズ
明本治男　大畑一郎

たくさんのご寄付をいただきました。
ありがとうございました。

編集後記

今回は、“地域の方々との交流”をテーマに掲載してみました。

どの行事もたくさんの地域の方々とお話ができたり、応援や励ましの声を頂いたりと、じねんじょをより知ってもらえる機会となりました。これからも、どんどん地域行事に参加し、地域の輪を広げていきたいと思います。